

『經典』に学ぶ

妙法蓮華經譬諭品第三

經文

いまこの三界は。皆是れ我が有なり。其の中の衆生は。悉く是れ吾が子なり。
而も今此の処は。諸の患難多し。唯我一人のみ。能く救護を為す。

現代語訳

「この宇宙は私のものです。その中にいる衆生は、すべて私の子です。しかも、この世界には、いろいろな苦しみが満ちています。それを救うものは、私だけしかないのです」

我が有なり　ここでいう「私」とは、釈尊お一人のことだけをさしているのではありません。真理・法を意味する「仏」のことであり、「真理を悟ったもの」という意味です。

意味と受け止め方

みんな仏の子

釈尊は、方便品のなかで「もろもろの仏がさまざまな方法（方便）をもって教えを説かれるのは、衆生に諸法実相を悟る仏の智慧を得させたいためです。仏は、すべての人を平等に仏の境地へ導くという、ただ一つの目的のために法を説くのです」と説かれました。

つまり、仏さまは「すべての人が、自分の本質が仏性であることを自覚し、自分と他人を分けて自己中心に考える『我』の心を取り除きながら、いのちの大本である『一つの大きな輝くいのち（本仏）』と常に一体感を味わえる境地（成仏）に達してほしい」と願われているのです。

この説法を聞いた舍利弗は、いままで仏さまという存在は、自分たちとは遠く離れ

た特別な存在だと思っ^{おも}てきたけれども、自分たちも努力^{どりよく}し^{じぶん}だいで^{ほとけ} 仏になれることがわ^{とくべつ}かり、大感激^{だいかんげき}します。

譬諭品は、「すべての存在は仏性^{ぶつしょう}であり、みんな仏のいのちの働^{はたら}きなんだ」と歡喜^{かんぎ}した舍利弗^{しゃりほつ}が、釈尊^{しゃくそん}にお礼^{れい}を申しあげるとともに、いままでの自分^{じぶん}のいた^あらなさを懺悔^{ざんげ}する場面^{ばめん}から始^{はじ}まります。

釈尊^{しゃくそん}は舍利弗^{しゃりほつ}の懺悔^{ざんげ}をたいへん喜^{よろこ}ばれ、「あなたがその氣持^{きも}ちを保^{たも}ち続^{つづ}け、正^{ただ}しい行^{おこ}ないを続^{つづ}けてい^{かな}らば、必^{かな}ず仏^{ほとけ}の境^{きょうち}地^{たつ}に達^{たつ}することができ^{じょうぶつ}ますよ」と成^{じょうぶつ}仏^{ほとけ}の保証^{ほしょう}（授記^{じゆき}）を与^{あた}えられます。

授記^{じゆき}をいただいた舍利弗^{しゃりほつ}は、飛^とび上^あがらんばかりに喜^{よろこ}びますが、釈尊^{しゃくそん}に「いまま^{おのれ}で己^{おのれ}の心^{こころ}の煩悩^{ぼんのう}を消^けし去^さることが修^{しゆぎ}行^{ぎやう}の目的^{もくてき}だと思^{おも}い込^こんでしま^おいましたが、それだけ^おではなく、衆生^{しゆじやう}のためにつくそうという菩薩^{ぼさつ}の心^{こころ}を起^{おこ}し、その行^{おこ}ないをずつと続^{つづ}けること^おで、最^{さい}高^{こう}の悟^{さと}りに達^{たつ}せられることがわ^{ほとけ}かりました。また、仏^{ほとけ}さまと私^{わたし}たちの関係^{かんけい}も“親子^{おやこ}”である^おとわからせていただき^おました。しかし、多^{おほ}くの修^{しゆぎ}行^{ぎやう}者^{しや}たちは、まだそのこと^おがハッキリと理^り解^{かい}でき^おずにいま^おす。どうか、この人^{ひと}たちにもわ^おかるよう^おにお説^おきくだ^おさい」と申しあげ^おます。

そこで釈尊^{しゃくそん}は、「三車^{さんしゃ}火宅^{かたく}の譬^{たと}え」をお説^おきにな^おられます。譬^{たと}えのおおよその内容^{ないよう}はつぎ^お次^おのとおり^おです。

ある国^{くに}のある町^{まち}に、長^{ちやうじや}者^{じや}がいま^おした。屋敷^{やしき}は広^{こう}大^{だい}なものでし^おたが、ひどく荒^あれ果^はて^おていま^おした。

その家^{いえ}が突^{とつ}然^{ぜん}、火^か事^じになり^おました。家^{いえ}の中^{なか}には子^こどもたち^{おおぜい}が大^お勢^{せい}いま^おす。そのこと^おに氣^おづいた長^{ちやうじや}者^{じや}は驚^{おどろ}いて引^ひき返^{かえ}し、中^{なか}にいま^おる子^こどもたち^むに向^むかっ^おて、「このま^おまでは焼^やけ死^しんでしま^おうよ。早^{はや}く外^{そと}に出^でてき^おなさい」と叫^{さけ}びま^おした。

ところ^おが、子^こどもたち^{あそ}は遊^{あそ}びに夢^む中^{ちゆう}で、燃^もえ盛^{さか}る火^ひに氣^おづきま^おせん。思^し案^{あん}にいま^おま^おった長^{ちやうじや}者^{じや}はふと、子^こどもたち^おがいつも^おくる車^{くるま}（乗^のり物^{もの}）をほし^おが^おっていたこと^おを思^{おも}い出^だし^おました。そこ^おで長^{ちやうじや}者^{じや}は、「ここ^おに、お前^{まえ}たち^おがほし^おが^おっていた羊^{ひつじ}の引^ひく車^{くるま}や、鹿^{しか}の引^ひく車^{くるま}や、牛^{うし}の引^ひく車^{くるま}があるぞ。好^すきなもの^おをあ^おげるから、早^{はや}く出^でてき^おなさい」と呼^よび^おかけ^おました。

長^{ちやうじや}者^{じや}の聲^{こゑ}を聞^きいた子^こどもたち^おは、それ^おいけとばかり^おに、次^{つぎ}々^{つぎ}と自^{みづか}ら外^{そと}に出^でてき^おま^おした。無^ぶ事^じに助^{たす}かったこと^おを見^み届^{とど}けた長^{ちやうじや}者^{じや}は、子^こどもたち^おがほし^おが^おっていた車^{くるま}では^おなく、白^{しろ}い大^{おお}きな牛^{うし}の引^ひく、し^おかもた^おくさん^おの宝^{たから}物^{もの}に飾^{かざ}られた立^り派^{っぱ}な車^{くるま}（大^{たい}白^{びやく}牛^{ごしや}車^{くるま}）を、み^おんなに等^{ひと}しく与^{あた}えた^おのです。子^こどもたち^おは、思^{おも}いがけ^おないすば^おらしい車^{くるま}を与^{あた}え^おられて、大^{おお}いに喜^{よろこ}びま^おした。

この譬えにある長者とは、仏さまのことで、子どもたちは私たちが衆生をさし、荒れ果てた家は苦しみに満ちた現実の人間社会、火事は私たちの煩惱を意味しています。また、子どもたちがそれぞれにほしがっていた羊の引く車は声聞乗、鹿の引く車は縁覚乗、牛の引く車は菩薩乗のことで、すなわち、人間にはさまざまなタイプがあり、修行の道をたどるにも、自分に合った方法（声聞乗、縁覚乗、菩薩乗）を選べばいいのです。しかし、その道のずっと先は一つにつながっています。それが仏になる道（一仏乗）です。

いままで、自分が歩いている道が最高の境地へとつながっていると、だれも知りませんでした。言うなれば、自分の好みによる羊、鹿、牛の引く車をもらえれば、それで最高だと思っていたのです。ところが、子どもたちは思いがけず、大白牛車（仏になる道）を、みんな等しく与えられて大歓喜します。この道が、仏の境地を得るための道につながっていたことがわかったからです。

つまり、「三車火宅の譬え」は、どのような境遇にある人でも、目の前に現われてくる苦しみや悩みを仏さまの教えにそって一つ一つ乗り越えていけば、やがて必ず最高の悟りを得ることができることを教えてくださっているのです。

宇宙はわがもの

『經典』に抜粋されている譬諭品の経文は、釈尊が「三車火宅の譬え」に続いて語られた部分です。譬えのすぐあとには、このように記されています。

「舍利弗よ、私もこの長者と同じ立場にいるのです。一切の衆生は、みんなかわいいわが子です。その子どもたちは、世間の楽しみに執着しているために、ものごとのほんとうのすがたを悟る智慧に欠けています。この世界は、ちょうど火のついた家のようなもので、いろいろな苦しみに満ちて、恐ろしいかぎりです」

このあとに、「この宇宙は私のものである」と経文が続きます。経文にある「私」とは「真理を悟ったもの」という意味ですから、この一節は、「真理を悟ったものにとっては、全宇宙がその人のものだ」ということです。

宇宙の真理を悟り、本仏と一体になることができれば、まったくこの世は「わがもの」です。しかし、この言葉は「宇宙は自分のものだ」という所有権を主張するものではありません。反対に、自分が宇宙に溶け込んでしまったと感じることなのです。

宇宙に溶け込んでしまうと感じることは、無我になることです。小さな我を捨てる、宇宙のすべてに生かされている自分を発見できます。すると、自分という存在が、みるみる宇宙全体に広がっていきます。無我こそ「宇宙はわがもの」に通じる、ただ

ひと
一つの道なのです。

宇宙がわがものであれば、その中に住む衆生は、すべてわが子であり、兄弟・姉妹であり、仲間です。すると自然と、人びとのために親身になってつくさずにはいられなくなります。これがほんとうの慈悲心なのです。

釈尊には遠く及ばないにしても、静かに目をつぶり、心を澄まして「宇宙はわがもの」と念じただけでも、何とも言えない広々とした心持ちになってきます。このように、日常のなかのふとした折々に、宇宙との一体感(大調和)を味わっていくことも、心を成長させるための大切な行の一つなのです。

よつ 四つの悟り

「宇宙はわがもの」という境地は、宇宙を貫く真理・法を自分のものとして、本仏と一体感を味わっていくことでもあります。

そして、真理・法をつかむということは、我的心を取り除くことです。我とは、水をにごらせる塵にたとえられます。にごりのもとである塵をすっかり取り除いてやると、水は清く澄んできます。つまり、我を捨てることによって、心が澄みわたり、ものごとのほんとうのすがた(相)を見通す力(智慧)を得ることができるのです。これが本質的な救われということなのです。

我を捨てきれないと、苦しみや悩みの世界から抜け出すことはできません。そこで釈尊は、譬諭品のなか(『經典』に抜粋されている部分の少しあと)で、苦しみの世界にいる人びとを救うために四諦の教えを説くのだと語られます。

四諦とは、「苦諦・集諦・滅諦・道諦」の四つの悟りです。

第一の悟りである「苦諦」とは、仏の教えを聞かない人びとにとっては、この世のすべてが苦しみであるということです。人生は精神的、肉体的、その他いろいろな苦しみに満ちています。その人生苦から逃げ隠れしないで、苦の実体を直視し、見きわめることが苦諦です。

たとえば注射を打つとき、幼い子どもは注射器を見ただけで、泣いたり、逃れようと抵抗します。ところが大人は、注射は必要なものであり、痛いのも一瞬だということがわかっているために平気でいられます。同じ痛みを感じることに変わりはないのですが、腹を据えて苦を直視すれば、たいていの苦は苦でなくなってしまうのです。

第二の悟りである「集諦」とは、さまざまに起きてくる人生苦が、なぜ起きたのかという原因を探究し、反省し、それをハッキリと悟ることです。

苦しみのさなかにいるときは、その原因がどこにあるのかを冷静に見きわめることが大事です。どのような因が、どのような縁と出会って、どのような果と報を生んだのかということ、報からさかのぼって見つめていくと、相・性・体・力・作を具えた因が、いかにあったかに気づくことができます。それが集諦の悟りです。

第三の悟りである「滅諦」は、さまざまな苦悩を消滅した安らぎの境地です。一時的な安らぎではなく、どんなことが起きてもグラつくことのない、ほんとうの安らぎは、釈尊が悟られた諸行無常・諸法無我・涅槃寂靜の三法印を悟ることができて、はじめて得られるものです。

ところが、この三法印、すなわち三大真理を悟ることは容易ではありません。日々の生活のなかで、教えに照らし合わせた行ないに励むことが大切です。

すなわち、後で述べる八正道と、先に学んだ六波羅蜜に精進することによって、自己中心だった自分のものの見方や考え方、人とのふれあい方を変えていく努力をすることです。これが第四の悟りである「道諦」です。

四諦を要約すると、人生は苦の世界であることを直視し（苦諦）、苦のほんとうの原因をつかみ（集諦）、日々の修行によって自己中心のものの見方や考え方を変えていくことで（道諦）、あらゆる苦悩は必ず解決できる（滅諦）という教えなのです。

苦の根本原因は貪欲にある

人生苦には必ず原因があります。釈尊は、この品のなかで「諸苦の所因は、貪欲これ本なり」として、苦の根本原因は貪欲であると説かれています。

貪欲とは、ものごとに「必要以上に執着する心」です。この執着が自己に向かうと、人は私の強い心になります。そして、我をつぶされると「自尊心を傷つけられた」などと思って腹を立てます。執着が外に向かうと、他人に「こうしてほしい」「こうでなければならない」「こうあるべきだ」などと要求する心が強くなり、求めるものが得られないとまた腹を立てるのです。

このようにして貪欲から瞋恚（怒りの心）が生まれ、その怒りによってものごとをありのままに見る智慧が覆い隠されてしまい、身（行ない）、口（言葉）、意（心）に悪かな行為をくり返し（愚痴）、結果的に悩み、苦しみがつきなくなるのです。

まさしく貪欲こそ、すべての苦を生み出すもとです。人間は、この貪欲が苦の原因だと気づかないために、欲望に執着して苦から離れられないでいるのです。ですから、自己中心の生き方をほんとうにあらためること（道諦）ができれば、苦は消滅（滅諦）してしまうのです。

式典などで発表される体験説法は、四諦の教えをこのように実践しましたという
事例集です。あることで苦しみ悩んでいた人が、苦から逃れたいために教えの縁にふ
れ、サンガとともに歩むなかで苦の根本原因に気づき、自分のこれまでの生活をあら
ため、教えに照らし合わせた人生を歩むようになる。いま、毎日がいきいきとしてい
る。

体験説法を聞かせていただくと、苦は一見マイナスのように見えますが、苦があっ
たおかげで仏法の縁にふれ、教えを学び、教えにそった人生を歩めるようになったこ
とがわかります。ですから、苦はマイナス要因ではなく、私たちがよりよく成長し
ていくためのプラス要因であるといえるのです。

生活を正す八つの道

滅諦の悟りは、私たちが日常の生活のなかで直面する、さまざまな苦しみや悩み
を根本的に解決し、どんなことが起きてもグラつくことのない、ほんとうの安らぎ(絶
対安穩)の境地です。この絶対安穩の境地に至るために、日々の生活のなかで教えに
照らし合わせた行ないに励むことが道諦でした。その具体的な方法を示した教えの一
つが八正道です。

この品の後半(『經典』に抜粋されている部分の少しあと)で釈尊は、「滅諦の為の
故に、道を修行す」と説かれます。この「道」とは、八正道をさしています。

八正道は、「正見・正思・正語・正行・正命・正精進・正念・正定」の八
つの正しい道であり、正しい生活の実践行です。「正しい」とは、真理に合ったとい
う意味で、ものごとを自分本位に、また固定観念によって見たり考えたりしないこと
です。

「正見」は、自分中心のものの方を見方を捨てて、正しく公平にもものごとを見ること
です。

「正思」は、むさぼる心(貪欲)や怒りの心(瞋恚)、我を押し通す心(邪心)を
捨て、すべてを正しく、仏のような大きな心で考えることです。

「正語」とは、うそ(妄語)、二枚舌(両舌)、わるぐち(悪口)、でまかせな言葉(綺
語)のない正しいものの言い方をすることであり、相手の思いに立った言葉をかける
ことです。

「正行」は、意味なく動植物の生命を絶つ(殺生)、盗みを働く(偷盗)、道な
らぬ男女の過ち(邪淫)のない正しい行ないをすることです。

「正命」は、人のために役立つ正しい仕事で得た収入で、生活必需品を求めると

とです。

「正精進」とは、自分がめざす正しい目的や目標に対して、一途に努力し続けることです。

「正念」は、常に正しい心を持ち、正しい方向に心に向け続けることです。つまり、感謝の心、仏さまに生かされていることを心に思いめぐらし、そのことを毎日の習慣にすることです。

それにより、心は周囲の変化によってグラグラ動かされないようになります。これが「正定」です。

人生には、人間関係や経済的なことなど、さまざまな苦悩が次々と起きてきます。しかし、いま自分が置かれている環境がどのようなものであっても、八正道に示されているように心の持ち方を変えて生活を正すと、貪欲が薄れていくため、日々の心の持ち方や行ないが自然と真理にそい、意識しなくても周囲と調和した生き方ができるようになります。すると、おのずと人生が楽しく、いきいきと送れるようになります。この周囲と調和した生き方こそ、宇宙に溶け込んでしまった（宇宙はわがもの）という境地に至る道なのです。

事例から学ぶ

事例編では、各品に込められた教えを、私たちが日々の生活のなかで、どのように生かしていけばよいかを、具体的な事例をとおして考えていきます。

鈴木さん一家プロフィール

おばあちゃん・ミチコさん（75）... 校成会の青年部活動も経験している信仰二代目会員

アキオさん（45）... 一家の大黒柱。ミチコさんの末息子

アキオさんの妻・タカエさん（38）... 婦人部リーダー。行動派お母さん

長女・ケイコさん（16）... やさしい心の持ち主の高校一年生。プラスバンド部

長男・ヒロシくん（9）... 元気いっぱいの小学三年生

ひとつのいのち

小学三年生のヒロシくんが学校から帰ってくるなり、居間で洗濯物をたたんでいる母親のタカエさんに言いました。

「お母さん。きょうね、学校でユニセフについて勉強したんだ」

「あら、よかったわね」

「ぼく、ユニセフのことは前に佼成会の少年部で教えてもらっていたから、たくさん発言したよ。駅前で募金箱を持って『ユニセフ募金へのご協力をお願いしまーす』って大きな声でお願いしたことも話したんだ」

「去年の五月の青年の日に、少年部のみんなで駅前やスーパーの前に立って、行き交う人たちにユニセフ街頭募金への協力を呼びかけたんだったわね」

「最初は声を出すのが恥ずかしかかったけど、たくさんの方が募金箱にお金を入れてくれるから、うれしかったなあ」

「集められたお金は、世界の子どもたちの健康と教育のために役に立つのよ」

「でも、きょう思ったんだけど、なぜ佼成会はユニセフに協力するの？」

「世界には、戦争や地震などの災害で家を失ったり、寒さをしのぐ服や毛布を持っていなかったり、食べ物がなくってひもじい思いをしている人たちがたくさんいるでしょう」

「アフリカの難民キャンプの様子を映したビデオを、教会で見たことがある。ものすごくやせた子どもたちが、たくさんいたよ」

「もし、ヒロシが難民生活をしなくてはならない状況になったら、どんな気持ちになるかしら？」

「うーん……..悲しくなるなあ」

「そうよね。そんな辛く悲しい思いをしているときに、だれかが援助をしてくれたら、うれしいと思わない？」

「うん、すごくうれしい。希望がわいてくる感じかな」

「だから佼成会は、『世界みんなが幸せに暮らせますように』という願いのもと、日本国内はもちろん、世界の人の役に立つ行動を起こしているの。でも、佼成会だけでは、できることに限りがあるから、世界各地でさまざまな援助活動をしているユニセフを応援しているのよ」

「わかった！いいことをするのに佼成会とかユニセフとか、そんなことにとらわれることはないんだね」

「そのとおり。ヒロシは『同悲同苦』という言葉を知っている？」

「うん。少年部しょうねんぶで教えてもらったよ。困こまっている人の気持ひとちになって、その人の役ひとに立たつ行おこないをすることでしょ

「そう。仏ほとけさまが『すべての人はみんな私わたしの子どもだ』とお説ときくださっているように、世界せかいの人ひとびとは、みんなきょうだい・親戚しんせきなのよ。むずかしく言いえば、仏ほとけさまと同じおな一つのいのちにつながっているのだから、悲かなしみや苦くるしみのさなかにいる人ひとがいたら、他人たにんごととは思おもえなくて、その人の幸ひとせを願ねがってとも歩あゆんでいきたいというのが『同悲同苦』の考かんがえ方かたなのよ」

すべては一仏乗いちぶつじょう

ヒロシくんが「遊びあそびに行いって来る」と玄関げんかんを元げんき気に飛とび出だしたあと、台所だいどころで話はなしを聞きいていたおばあちゃんのミチコさんがタカエさんに話はなししかけました。

「いまの話はなしを聞きいていて、むかしのことおもを思だい出したよ」

「戦後せんご、日本にほんもユニセフから援助えんじょを受けていたということですか？」

「私わたしが青年部せいねんぶのときのことよ。私わたしの父ちち親おやはね、はじめ信しん仰こうに反はん対たいだったの」

「まあ、たくさんの人ひとをお導みちびきした幹部かんぶさんだったと聞きいていますけど」

「それがね、入会にゅうかい後ごしばらくは、母はは親おやも私わたしも父ちち親おやを説得せつとくするのがたいへんで、活かつ動どうにほとんど参さん加かできない時期じきがあったの。これでは信しん仰こうをしている意味いみがないと思おもったくらいよ。そのときにね、主任しゅにんさんが、『活かつ動どうに出でているから信しん仰こうをしているとは言いえません。お父とうさんに仏ほとけさまとのご縁えんを結むすんでいただくお手て伝だいをするのも、立り派っぱな仏道修行ぶつどうしゅぎょうです。それにはまず、自分じぶんが仏ほとけさまの弟でし子こであるという自じ覚かくに立たって、教おしえにそった身みの振ふる舞まいができているか、常つねに省かえりみることが大事だいじです』と教おしえてくださったの」

「まあ、そんなことがあったんですか」

「ええ。人じん格かくを完かん成せいするための仏道修行ぶつどうしゅぎょうには、さまざな形かたちがあるから、『これがほんとうの修行しゅぎょうで、こっちは二に次じ的てき、三さん次じ的てきなものだ』などということはないのね。譬諭品ひゆほんにあるように、自分じぶんの目めの前まえのことを精せいいっばいさせていただくことが、そのまま一ひとつみちの道じょうぶつ・成むす仏ぶつにつなつがつっていくんだと、私わたしたちは父ちち親おやのことことをとおして学まなばせていただいたの」

「ユニセフを支援しえんするのも、家か庭ていや職しょく場ばでのご法ほうの実じつ践せんも、みんな同じおなじようどうとに尊とうといぶつ仏道修行ぶつどうしゅぎょうなんですね」

「譬諭品ひゆほんには、『すべての人ひとは等ひとしく仏ほとけの子こである。自じ我がをこえて一いっ心しんに修行しゅぎょうに励はげめば、その道みちが成じょうぶつ仏ぶつの道みちにつなつがつていることがわかり、さらさらに修行しゅぎょうを重かさねると仏ほとけと

の一体感、すべての存在との一体感を味わえる』と説かれているよね」

「ええ。大事なことは、私たちがすべて仏さまの子どもだという自覚に立つことで
すね」

「私もみんなも仏さまの子どもなんだと思うだけで、心があたたかく柔らかにな
った気がしてくるね」